

三俣祭りについて

三俣（みつまた）祭りとは、米の豊作を祈るため、7月12日に近隣の伊米（いめ）神社で行われる祭りである。この神社には食物の神である保食神（うけもちのみこと）が主祭神として祀られている。祭りを始めたのは、江戸時代（1603～1868）に大名などの身分の高い旅人をもてなす宿の経営で成功を収めた村の4人の名主たちである。祭りの中心となる神輿は、1807年に京都で作られたものだ。

祭りの前夜には、伊米神社の神主が神楽（かぐら）と呼ばれる神聖なる舞を行い、神々たちをもてなす。祭り当日の朝には、ご神体の形をした祭神を神輿に移す儀式が執り行われる。ご神体が目につかないように細心の注意が払われ、取り扱う人はご神体に息を吹きかけてもいけない。その後は、住民たちに神の恵みを届けるべく、昔ながらの貴族の服装に身を包んだ担ぎ手たちが神輿を担いで町内を練り回る。江戸時代には、この神輿行列は村の長の各家に立ち寄っていたが、現在立ち寄るのは、池田家（いけだや）前、みつまた道の駅、公民館、および宿泊施設1軒のみである。

各立ち寄り場所では神輿を外に置き、神主や担ぎ手などの随行者が中で休んでいる間に、地域の住民たちが神々を喜ばすためにさらに踊りを繰り広げる。踊りに決まった形はないが、近年では現代的な味わいも取り入れられている。巡回が終わると神輿は伊米神社に戻り、神々が内陣に戻される。